

肺がん免疫療法の治療成績改善を目指した医師主導治験

九州大学病院呼吸器科 准教授 田中 謙太郎、科長／教授 岡本 勇

ポイント

- ・九州大学病院呼吸器科は、京都大学本庶佑名誉教授の研究室と共同で、進行性非小細胞肺がん患者さんを対象に医師主導治験をおこない、ニボルマブ・ベザフィブラート併用治療は、安全で、ニボルマブ単独治療と比較し有効性が高い可能性が示されるという結果を得ました。
- ・ニボルマブをはじめとする免疫チェックポイント阻害剤によるがん免疫療法は、肺がんを含む多くのがん腫の治療成績を改善しています。
- ・本研究成果は『Science Translational Medicine』に、2022年12月にパブリッシュされています。

ニボルマブをはじめとする免疫チェックポイント阻害剤によるがん免疫療法は、肺がんを含む多くのがん腫の治療成績を改善しています。われわれは京都大学本庶佑教授の研究室との共同で、進行性非小細胞肺がん患者さんを対象にニボルマブと高脂血症に対して使用されるベザフィブラートを併用する第1相医師主導治験をAMED（日本医療研究開発機構）の支援下に実施しました。

本医師主導治験はニボルマブでの治療に際し、がん細胞を攻撃する役割を担う重要な免疫細胞であるキラーT細胞のエネルギー代謝を、ベザフィブラートが変化させ機能を高めるという前臨床データに基づいた臨床試験です。

治験の結果、ニボルマブ・ベザフィブラート併用治療は、安全で、ニボルマブ単独治療と比較し有効性が高い可能性が示されました。患者さんの血液を用いた分子レベルの解析で、ベザフィブラートによるキラーT細胞のエネルギー代謝への影響を確かめることができました。更なる臨床試験により、本併用療法の臨床導入が期待されます。